

## 家族が罪を犯すことによる日常生活の変容

### ——スティグマの内在化と情報の管理／操作——

筑波大学 高橋康史

#### 1 目的

本報告の目的は、犯罪者を家族にもつ人々が、事件を契機としてどのような経験をするのかについて、スティグマを鍵概念に明らかにすることである。これまでの犯罪加害者家族にかんする研究では、犯罪の原因として家族を捉える立場、再犯の抑止要因として家族を捉える立場を中心に論じられてきた。この二つの立場は、犯罪者を軸に家族を副次的な視点から捉えており、家族の主観的な経験を描いていない。これらの視座に対し、近年になって家族がもつ被害者性を捉える立場からの研究も見られるようになってきている。しかし、この立場は家族の経験について受動的に捉えている傾向があり、経験を能動的に捉える視点に欠けている。そこで、家族をラベリングに対処する存在として捉える立場に注目する。本報告では、スティグマの感情である「恥」、情報の管理／操作に注目し、犯罪者を家族にもつ人々の主観的経験を描き出すことを試みる。

#### 2 方法

本報告では、犯罪者を家族にもつ人々に対するインタビュー調査を取り上げる。分析は、佐藤郁哉による『質的データ分析法 (2008)』を参考に、インタビューデータを切片化し、既存の概念を用いながら再構成するプロセスを踏んだ。分析における概念は、家族が抱く「恥」と「罪」を類型化したCondry (2007) による恥の網の目、May (2000) による情報の管理／操作を用いた。

#### 3 結果・結論

インタビューの分析の結果を次のように整理することができる。Condry (2007) による恥の網の目をもとに語りを分析した結果、次の三つの特徴がみられた。それは第一に、「犯罪者の家族」というスティグマは、犯罪加害者家族固有の経験を通して、自らの異質性を自覚することにより、個人に内在化されていた。第二に、家族は異質性の自覚とともに「普通さ」を志向していた。そして第三に、子が罪を犯した人の語りでは、＜責任性の付与＞を経験しながらも、罪の意識は確認されなかった。代わりに、＜異質性の自覚＞が確認された。

May (2000) による情報の管理をもとに語りを分析した結果、次の二つの特徴がみられた。第一に、周囲に事実を知られていない状況では、情報の管理を戦略的に用いることで、家族は社会関係を構築することに成功していた。第二に、周囲に事実が知られていない状況で、情報の管理により自らの正常性を認識できる経験を得ることが、家族の一時的な処方せんになっていた。

以上の分析結果を踏まえると、日本に住む犯罪者を家族にもつ人々は、スティグマにかんする経験において正常性にとられる傾向があるといえる。それは、家族が恥の感情や＜異質性の自覚＞を経験しながら「普通さ」にとらわれていたこと、情報管理の実践によって社会関係を構築することと同時に自らの正常性を確認する作業も行っていたことから考えることができる。

#### 文献

Condry, Rachel, 2007, *Families Shamed: The Consequences of Crime for Relatives of Serious Offender*, Willan Publishing, UK.

May, Hazel (2000) "Murders' Relative: Managing Stigma, Negotiating Identity", *Journal of Contemporary Ethnography*, 29(2): 198-221.